



Title	長崎方言小史(1) 平山蘆江「唐人船」を方言資料とした
Author(s)	愛宕, 八郎康隆
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 35, pp.1-10; 1986
Issue Date	1986-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/32941
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T00:06:26Z

長崎方言小史（1）

—— 平山蘆江「唐人船」を方言資料とした ——

愛 宕 八郎康隆

はじめに

筆者は、かつて、『方言資料としての「唐人船」』（『国語と教育』第2号、長崎大学国語国文学会 1977）、『長崎方言文末詞推移考——平山蘆江「唐人船」を方言資料として』（『長崎大学教育学部人文科学研究報告第33号、1984』）の2篇の小論で、大正末期頃から、およそ60年間の、長崎の下町とも言うべき、新地・籠町（旧新地・広馬場・本籠町など）境界の方言の推移を、とくに、文末詞を対象に推論を試みたのであった。その際、大正末期頃の方言資料として、平山蘆江の「唐人船」（蘆江の自伝的小説）の方言会話を利用、活用するのに、大きな問題のないことを検討した。今回は、「長崎方言小史」と題して、新地・籠町境界の方言を中心に、文末詞を除く他の言語面を対象に、およそ60年間の推移について、2回にわたり推論を試みたい。なお、作中の文例の話者、相手は、次表を参考されたい。

なお、「唐人船」は、現代大衆文学全集22平山蘆江集、平凡社〈P.1～P.407〉を資料とした）

1. 浦川幸之助(12歳)〈筆者平山蘆江がモデルと言われる。浦川家(酒造業)の長男。居住地、長崎市本籠町。〉
2. 浦川おつね(30歳代)〈幸之助の母、浦川仙五郎の妻〉
3. 浦川仙五郎(中男)〈幸之助の父〉
4. 浦川の祖父(老男)〈幸之助の祖父〉
5. お光(青女)〈浦川家の下女〉
6. 唯八(青男)〈浦川家の下男〉
7. お愛(青女)〈浦川家の下女〉
8. 神川長太郎(中男)〈浦川おつねの実弟、神川家の長男〉
9. 神川甚之助(青男)〈浦川おつねの実弟、神川家の次男〉
10. 神川重吉(少男)〈浦川おつねの実弟、神川家の三男〉
11. 清川お葉(青女)〈浦川仙五郎の妻〉
12. お銀(幼女)〈浦川仙五郎とお葉との間に生まれた娘、浦川幸之助の義妹〉
13. 加藤(中男)〈浦川家の貸家に、山口から移住してきた社員〉
14. 加藤小夜子(12歳)〈加藤家の一人娘、後クリスチャンとなる〉
- ※15. 舟井おあき(9歳)〈浦川幸之助の友達で、隣家海産物問屋の娘〉
- ※16. 舟井恭太郎(13歳)〈舟井おあきの兄、幸之助の友達〉
- ※17. 山下宅市(少男)〈浦川幸之助の友達〉

18. 山下おさき(中女)〈山下宅市の母〉
 19. 山下老人(老男)〈山下宅市の祖父〉
 20. 矢代はな(少女)〈蛇屋の矢代の妹娘〉
 ※21. 豊造(少男)〈浦川幸之助の友達〉
 ※22. 千公(13歳)〈浦川幸之助の友達〉
 23. 鉄仙(17歳)〈長崎生まれの支那人〉
 24. 泰昌号(中男)〈新地の大商人で、鉄仙の母子が世話になっている貿易商〉
 25. 阿玉〈アヨン〉(青女)〈支那人とも日本人ともわからない、うすのろの女〉
 26. アンリ・ゴールド(少男)〈アメリカ人で、ばくち好きの不良少年〉
 27. おくま(中女)〈アンリの叔母、日本人〉
 *は、浦川幸之助の友達に当る人物

〔1〕音 声 面

まず、音声面について述べるが、資料が、小説という文献資料であるため、詳細な音声考察はできないが、許容の範囲で扱うこととする。

(1) 音便現象

①動詞のウ音便

- 「……。豊造，豊造，何ぼうろうろ（筆者注。原文は縦書きで、返復符号が用いられている。以下、同様に措置した。）するとか。台所へ行って水ば飲うで来い。……。」(P219<4> 仙五郎→豊造)
- 「そんなら仕方なか，神山のおっちゃまば呼うで来る」(P339<2> 豊造→唯八)
- 「あんしゃま，何の本へ，声が出して読うで聞かせてくれませ」(P255<3> おあき→幸之助)
- 「僕が頼うでやるか，あしたも，もう一度行くけん。僕が頼うでやる」(P258<-7> 宅市→幸之助)
- 「お母^{つか}さんも喜うどんなはります」(P297<5> 幸之助→おさき)

②形容詞のウ音便

- 「少し加減が悪うして寝て居りますけん」(P361<-3> おつね→唯八・他)
 - 「暗うして怖ろしか」(P9<2> おあき→幸之助)
 - 「……。口前^{くちまへ}ばつかりようして」(P297<-7> おさき→幸之助)
 - 「……。あん時は，もう，くやしうして くやしうしてたまらんぢゃったばい」(P258<3> 宅市→幸之助)
 - 「うちあ，先刻，恥かしうてたまりませんでした」(P212<-3> いく子→アンリ)
- 以上のウ音便のうち，②形容詞のウ音便は，今日も長崎方言（旧長崎市域の方言）でよく行われているが，①動詞のウ音便は，今日では，ほとんど聞くことができない。

(2) 連声現象

- 「重しゃんな帰って来たげななん」(P358<-3> 仙五郎→重吉)
 - 「爪切り髪切り，爪やのお内儀^{かづ}さんな，爪切^かって死ないた」(P89<7> 鉄仙)
- など，撥音の後の「ワ」音節が，「ナ」に発音される連声現象は，今日では，ほとんど耳に

できなくなっている。市内在住の一老女は、昔は、

○オヨ^ーサンナ^ナ ドコ イッタ トヘー。 およう（人名）さんはどこへ行ったのねえ。
などの言い方をしていたが、昨今は口にしなくなったと回顧していた。

(3) [~u] < [~o]

「しうぢ」（音価は「シュージ」と考えられる）（小路，つまり路地の事）（P225<7>群衆）
「うん，さうしうさうしう」（音価は「シュー」と考えられる）（P165<-2>幸之助→宅市）

○「あらどうしうか」（P125<4>おあき<独白>）

このような音変化は，今日もよく聞くことができる。

(4) [n] < [mo]

○「……どこでん構はずに焚火ばして，……。」（P248<3> 巡査→警部）

作中では，「どこでも」と撥音化しない形の表記が圧倒的に多いのに対して，今日の長崎方言では，「ドコデン」と撥音化するのが一般状況である。これを，以前は撥音化していなかったものが，撥音化したという推移と受け取るべきか，蘆江の表記そのことに問題があったとすべきなのかは難しいが，県下の各地に，今日も撥音化を見せないところがあることからすれば，蘆江の時代には「どこでも」の撥音化は，今日のように優勢ではなかったと考えるのが穏当ではなからうか。

(5) [g] < [k]

○「あしたの昼すぎに，うちまで来まっせ。逢はせて上げますげんのう。……」（P375<7> おはな→幸之助）

○「まアよかたい，こっちい出せ。数へてやるげん」（P380<9> 仙五郎→豊造）

作中2例を数えるのみであるが，このような接続助詞「ケン」の濁音化は，今日見ることはできない。

以上の他には，

○「どけえ行ったか判りません，こゝ二三日ばかり，誰れも噂ばまっせんけん」（P218<-6> 幸之助→小夜子）

の「どけえ」（音価は「ドケー」と考えられる）がある。これは，「どこに」からの音訛と推定されるが，今日，長崎方言では，「ドケー」の形態が常用されているが，作中には，上記の1例のみしか見られず，他はいずれも「どこへ」，「どこに」となっている。蘆江の時代に，「どこへ」が実際によく行われていたかについては，多分に疑問が残るにしても，「ドケー」の融合形は実際に振わなかったのかも知れない。

〔2〕文 法 面

(1) 形容詞・形容動詞

○「やかましか，お母は忙がしかと。……」（P76<-3> 鉄仙の母→鉄仙）

○「気の毒かもんかい，……」（P325<-2> 宅市→幸之助）

作中，形容詞は，ほとんど，上記例のように，カ語尾形容詞であるのは，今日の長崎方言状況と同様であるが，形容動詞については，上記の例のようにカ語尾になるものよりも，連体形が，次下の例のようにナ語尾となるものが多く，今日の長崎方言で，カ語尾が常であるのとは差異を見せていて注目される。

○「……。大層綺麗なお母しゃまでございますげなたい。……」（P287<-7> お光→幸之

助)

- 「……。不思議な事でございますのうし」(P225 <7> 群衆)
- 「さう聞くと、可哀さうなものでございますたい」(P246 <4> 群衆)

(2) 動詞

動詞では、古態の二段活用形式が作中に、よく見られる。

- 「顔の丸かけん、似て見ゆるとでございますう」(P152 <-1> 幸之助→おつね)
- 「……。恭ちいの呼ぶ声が、内の座敷で聞こゆるたい、……」(P20 <4> 幸之助→おあき)
- 「……。お天気はこんげんよかるとに、まア、どうしてかうまで海が荒るるとでございますまっしょかの」(P391 <-6> おとみ→幸之助)

このような、動詞の二段活用形式は、今日の長崎方言にも、深く根を下ろしてよく聞かれる。

(3) 人代名詞

①自称

- 「……。さあ、ここに開けろ。おれも一緒に数へてやるけん……」(P378 <-7> 仙五郎→幸之助)
- 「フン、そればおれが知った事か」(P70鉄仙→千公)

作中では、「おれ」は、男性の自称(単数)として用いられているが、現今の長崎方言では、通常、「オイ」と発音される。

- 「おんどは川端通りから新大工町の方ばまはって来るばい」(P367 <-7> 豊造→幸之助・唯八)
 - 「……。そんならおんど(私)も掘って加勢して上げうか」(P4 <7> おあき→幸之助)
- 「おんど」は、「おれ」にくらべてややくだけたことばで、男女ともに用いられているが、現今の長崎方言では、ほとんど聞かれなくなっている。
- 「大分暗うなった、早うかへらうや、おんだ叱られるかも知れん」(P210 <6> 豊造→恭太郎・千公)
 - 「……。本の事はの、この地面のずっと底はアメリカになつとるげな。おんだ(僕)けふ学校で聞いて来た」(P3 <4> 車之助→おあき)
- 「おんどは」の縮形と考えられる、この「おんだ」は、古く、近世の森川許六の長崎方言で詠んだ歌、「あまたちのじゅったんぼうでどんくとる あらよそわしか おんだいやばい」にも現われているが、現今の長崎方言には見られなくなっている。
- 「おんたちば助けに來たとぢやなかばってん、きつと蔵は開かるにちがひなか」(P23 <-5> 幸之助→おあき)
 - 「……。ヘン、おんたちの智恵はこの通りこの通り」(P34 <-4> 恭太郎→幸之助・豊造)
- 「おんたち」は「おれたち」からのもので、男性の自称の複数形として用いられているが、現今の長崎方言では、「オイタチ」に変化している。
- 「おんども知らん、どう考へても判らん、……」(P18 <-8> 幸之助→おあき)
 - 「おんども減らん」(P15 <2> 幸之助→おあき)

「おんど」もまた、「おんたち」同様、自称の複数として用いられているが、現今これを聞くことはできない。

自称(単数)の「わたし」は、作中、

- 「私^{わたし}が見て来まっしょ」(P137<2> 唯八→幸之助)
- の1例を数えるのみで振わないが、
- 「……、わたいがまアだ浦川の家に来ずに居る時、わたいと仲よしでな、いづれわたいは遠藤さんへ行くもんと思うとった、……」(P25<8> 幸之助の母→幸之助)
- などの「わたい」は女性語として用いられている。
- 「……。考へて見れば、あん時、もう、日清戦争が始まるか知れんと私^{わたし}たちは思うとったたん」(P57<-4> 祖父→幸之助)
- 「私^{わたし}たち」は作中、これ1例であるが、老男の用語と見られる。
- 「わたい」,私^{わたし}たちは、現今ほとんどこれを聞くことができない。
- 「へ、私^{わたし}も先刻から心配しとつとでございますばってん、……」(P365<-5> おあい→仙吾郎)
- 「……。私^{わたし}が大浦の方さね行つて見まっしょ」(P365<-5> 唯八→幸之助)
- 「わつつ」(音価は「ワツツ」と推定される)は、自称(単数)として、男女ともに見られるが、現今は廃語となっているようである。
- 「うちはちつとも睡たうなか、……」(P20<-1> おあき→幸之助)
- 「へ、うちゃ知つとります、此間貴方に教へてもらひましたけん」(P206<-3> いく子→アンリ)
- 「うち」(単数)は女性語としてよく用いられているものの、現今では振わなくなっている。次いで、作中の対称の人代名詞を見ると「おうち」,われ」,わがたち」が目につく。
- 「あんしゃま、うちが、おうちのお母しゃまにあやまるけん、勘忍してくれませ」(P280<3> おあき→幸之助)
- 「それでもおうちがあんげん事ば言ひなはるけん——」(P212<-1> いく子→アンリ)
- 「幸ちい、おうちあ、もう内にかへるへ」(P371<-1> おはな→幸之助)
- 「おうち」は、作中、女性主用の対称(単数)の人代名詞として幅広く用いられているが、現今では、中・老年女性に、わずかに用いられているにすぎない。
- 「見ろ。われが横合から飛び出すけん、ハタは破れて了うたぢゃつか」(P70<3> 千公→鉄仙)
- 「重吉、われが太か事ばつかり言うたつちゃ何になるもんか。……」(P361<3> 長太郎→重吉)
- 「さあ、われも食べろ」(P365<5> 仙五郎→幸之助)
- 「われ」は、作中、男性のぞんざいな対称(単数)の人代名詞として用いられているが、この状況は、そのまま現今に受け継がれていると言えよう。「われは」はまた、
- 「アンリ、わら理屈つめに逢はするつもりか、……。」(P177<-5> 鉄仙→アンリ)のよように、「わら」と実現される。
- 「……、そげん大人数で、わが達あどうも仕得んとぢゃろか、エーイ」(P141<5> 阿玉→群衆)
- 「わが達」の対称複数形は、作中に1例を見るのみで、現今ともに振わない。
- 他称(単数)の人代名詞としては、作中に、次例の「あやつ」が1例見られるのみである。
- 「さうかい、あやつは悪い奴けんのう。……。」(P271<3> 幸之助→宅市)

卑称と見られる「あやつ」は、現今もまま聞かれる。

(4) 親族・隣人呼称語

①親族呼称語

作中の親族呼称語として目につくのは、「あんしゃま」(兄さん)、「あねしゃま」(姉さん)、「おかししゃま」(お母さん)、「おとししゃま」(お父さん)、「おばしゃま」(おばさん)など、接尾辞に「しゃま」をとる一連の語詞である。すなわち、

○「内のあんしゃまは、どういふ横道かもんぢやうか」(P46<-4> おあき→幸之助)

○「兄しゃま、おぎんちといふ子は私の妹でせう」(P240<2> 幸之助→重吉)

「あんしゃま」は、作中、女性主用のことばとしてよく用いられている。

○「綺麗なあねしゃま」(P276<8> 幸之助→おあき)

○「綺麗な姉しゃまの抱いとんなはった」(P276<7> おあき→幸之助)

○「……。大層綺麗なお母しゃまでございませうなたい。……」(P287<-7> お光→幸之助)

○「お母しゃま。でんがくば食べうごたる」(P311<3> 宅市→おさき)

以上の「あねしゃま」「おかししゃま」は男女共用のことばと見られる。

○「……。戦争の芝居のけんの、君のお父しゃまは、僕に云ひなさったばい。……」(P258<-5> 宅市→幸之助)

○「おばしゃま、勘忍しておせつけませ、……」(P280<6> おあき→おつね)

「お父しゃま」、「おばしゃま」、先の「あんしゃま」、「あねしゃま」、「おかししゃま」などの呼称は、今日の長崎方言では、すでに聞かれなくなっている。

○おれのお母も君が隠しとるぢやろ。さあ尋常に白状したまへ。……」(P184<1> 鉄仙→幸之助)

○「やかましか、お母は忙がしかと。……」(P76<-3> 鉄仙の母→鉄仙)

「お母」は、先の「お母しゃま」よりは、一段下位に立つ呼称である。

○「山下のお内儀さまがそんげん事ば云ひよんなはりましたか」(P349<-3> 唯八→幸之助)

○「坊ぢやま。今夜はもうお休みまっせ。お内儀さまがさう仰やりましたけん」(P288<2> お光→幸之助)

「お内儀さま」は、主婦の高い敬称となっている。

「お母」、「お内儀さま」もまた、今日すでに聞けなくなっている。

②隣人呼称語

隣人呼称語は、呼び名に「しゃま」「しゃん」「ちい」などの接尾辞を添える形をとる。

○「……。そんげんもんはつまらんたい、のう小夜子しゃま」(P126<3> おあき→小夜子)

○「……。小夜子しゃまはよかとでございまっしょ」(P111<-4> 幸之助→小夜子)

作中、「～しゃま」は、すべて、登場人物の加藤小夜子(山口から転地して来た会社員の一人娘)という人物に特定的に用いられているところからすれば、次の「～しゃん」よりは、やや改まった呼称かと思われる。

○「……。甚しゃん、早速東京に出らるるごとしてやりたまへ。……」(P359<-6> 仙五郎→甚之助・重吉)

○「おあきしゃん、おあきしゃん」(P156<-1> おあきの母→おあき)

○「幸しゃん、わたいと一緒においで」(P24<1> 幸之助の母→幸之助)
これらの「～しゃん」より、さらに親愛感をこめてする呼称に次下のような「～ちい」がよく用いられている。

○「二人が来とって、豊ちいばかりどうしたとぢゃろか」(P54<3> 宅市→幸之助)

○「幸ちいもおあさちいも誘うて来なんせ。それから、豊ちいはどうする、へ」(P48<4> 宅市→幸之助)

○「うん、おぎんちい、抱っこしうか、来なんせ」(P291<6> 幸之助→おぎん・お愛)
この「～ちい」は、男女のいずれにも用いられる。

以上の、呼び名に、「しゃま」、「しゃん」、「ちい」を添える呼称は、現今ではすでに聞くことはできない。

(5) 連体詞

連体詞では、「こんげん」、「そんげん」、「あんげん」、「どんげん」が、作中よく見られる。

○「……、こんげん事ば、坊ちやまにや云はんがよかばい」(P297<-2> 唯八→豊造)

○「……、こんげん子供でも、よう感じると見ゆるたいなん」(P366<9> 仙吾郎→おあい)

○「あら、こんげんもののある」(P332<7> 宅市→幸之助)

○「……、こんげんところに住んどつとぢゃろか」(P332<4> 宅市→幸之助)

以上は「こんげん」例、

○「……、そんげんもんば何故書くとかって、大層叱られました」(P149<-6> 幸之助→おつね)

○「重、そんげん事ばいふもんぢゃなか」(P236<-4> 甚之助→重吉)

○「いゝえ、そんげんわけぢゃなかばってん」(P324<-1> 鉄仙→アンリ)

○「どうして又あんげんところに あんげん穴ば掘ったとなん」(P103<-4> 母→幸之助)

○「僕たちも、あんげん芝居の真似ばして見うか」(P259<5> 宅市→幸之助)

○「何しろ家一軒について墓所にとってある地面が十坪や十二坪なかところはどんげん貧乏人でもありゃしまっせんものう」(P129<7> 仙五郎の父→加藤)

○「……、どんげん事ばさせられるか知らんばってん、……」(P92<5> 鉄仙→アンリ)

「そんげん」、「あんげん」、「どんげん」もよく用いられている。このような状況の一方で、次下のように「こげん」、「そげん」、「どげん」などの用例も見られるが、前者に比べて劣勢で「あげん」は見られない。

○「……、小夜子一人で籠町ば訪ねさするかも知れん、と、こげん話でございましたたい」(P383<-2> 唯八→幸之助)

○「そげん事はございますめえ。……」(P345<-7> 唯八→幸之助)

○「どげん継母の話でございますか」(P344<5> 唯八→幸之助)

作中では劣勢である「こげん」、「そげん」、「どげん」ではあるが、現今の長崎方言では、逆に、「コンゲン」、「ソゲン」、「アゲン」、「ドンゲン」などは振わず、「コゲン」、「ソゲン」、「アゲン」、「ドゲン」が常用されている。

なお、「こんげん」、「そんげん」、「あんげん」、「どんげん」などには、連体詞としての用法のほかに、次下のように、副詞としての用法も見られる。

○「……。お天気はこんげんよかると、まア、どうしてかうまで海が荒るとでございましたまっしょかの」(P391<-6> おとみ→幸之助・連れ)

- 「さうかい、そんげん腹かいて(怒る)居んなけるとかい」(P272<-3>幸之助→宅市)
- 「……。あんげん横道か奴あカンカンたたきが相当しとると。……」(P351<-1>おつね→仙五郎)
- 「……。お母^{つか}さんの身体はこの家ば出たらどんげんなって行くか判らん身体たい。……」(P149<-4>おつね→幸之助)

なお、短形の中では、副詞の用法は、

○「ああ痛か、人ばこげん縛ってからに」(P82<4>鉄仙の母の独白)
 の例に見られるにすぎないが、現今の長崎方言にあつては、「コゲン」、「ソゲン」、「アゲン」、「ドゲン」の諸形に、次下のような副詞の用法が見られる。

- コゲン シェン ネー。こんなにしなよ。
- ソゲン ユータッチャ ムリ バイ。そんなに言っても無理だよ。
- アゲン ツカエバ イクラ アッタッチャ タラン ヨネー。あんなに無駄使いすれば(お金が)いくらあつても足りないよねえ。
- ドゲン スツ トネー。どうするのねえ。

連体詞として注目しておきたいものに、「本な」がある。

- 「……。そのけん、本な事いへば、君のうちは今年が初盆に当つとばい」(P238<-2>甚之助→幸之助)
- 「……。本なお母^{つか}さんといふ人は僕が神戸にやられとる間に、……」(P345<6>幸之助→唯八)
- 「本な事は、桐炭がよかとでございますげなばってん、ありまっせんけん」(P146<-5>幸之助→おつね)

「本な」は、「本当の」の意である。これが現今では、

○コリヤ ホンナ モン ネー。ニセモン ネー。これは本物かねえ。にせもんかねえ。
 のように、「ホンナ モン」の慣用形で聞かれる。

「本な」に関連して、次下のような、「本な事」を一語とする慣用の副詞的用法が見られる。

- 「そんなら、本な事、日本が負けますか」(P57<4>幸之助→祖父)
- 「……。議論でやらずに、兵隊ば持って来て、支那は本な事、卑怯かけんのう」(P202<4>恭太郎→豊造)
- 「法華宗の人はほんな事、やかましかなん」(P147<-4>おつね→幸之助)

このような「ほんな事」事象は、今日の長崎方言では、

- ホンナコテ コマッタ モン タイ。ほんとうに困ったものよ。

のように、「ホンナコテ」の形で行われている。

(6) 接続詞

接続詞としては、順接の接続詞「そのけん」、「そのけん」、逆接の接続詞「そればってん」、「ないどん」が、次下のように見られる。

- 「その弟は、物事がさうきまった矢先に死んだとげな。そのけん、本な事いへば、君のうちは今年が初盆に当つとばい」(P238<-2>甚之助→幸之助)
- 「さうかい、あやつは悪い奴けんのう。そのけん、僕が松崎大尉の方から、先にやらうと云うたとこれ、あやつが何でも原田重吉からやらにや、承知せんといふもの

けん、あんげん事になったとたい。……」(P271<3> 幸之助→宅市)

「そのけん」は、現今の長崎方言では、ほとんど聞かれず、「そのけん」が、わずかに、長崎市周辺域に、

ソノケン サー。 そうだからねえ。

などの表現として聞かれるに過ぎない。

○「……。それから豊ちいのお母^{かか}も云うた。そればってん、本なお母^{つか}さんといふ人は僕が神戸にやられとる間に、すりかへて了うて、別のお母さんが来たとぢやなからうか」(P345<6> 幸之助→唯八)

○「うん、そればってん、海岸の方に出ると、うちのお父^{とつ}さんに逢うかも知れんばい」(P331<3> 幸之助→宅市)

このような「そればってん」は、そのままの形態では、もはや、現今の長崎方言(長崎市街域)には見られなくなっており、

○ソーバッテン ヤツテミンバ ワカラン トヨー。 そうだけれども、実際にやってみないとわからないのよ。

のように、「ソーバッテン」の形で、古老のうえに聞かれるにすぎなくなっている。

○「へえ、さうでがंसりたい。ないどん、こんげん事は、坊ちやまにゃ云はんがよかばい」(P297<-2> 唯八→豊造)

○「そらまア、さういふ継母もございまっしょ。ないどん、よか継母さんもございますたい。……」(P343<-1> 唯八→幸之助)

このような古態の「ないどん」(「なれども」出自)は、作中でも使用例は乏しいが、長崎方言でも、今日では、もはやこれを聞くことはできない。ただ、長崎市周辺域では、

○キュー クミアイー イタトナイドン キチャー オランジャッター。 今日組合へ行ったけれども(彼は)来ていなかった。

などのように、「～タトナイドン」の接続助詞として、古老のことばに見出されるという状況である。

(7) 補動詞

いわゆる補動詞としては、次下のような進行態表現の「よる」、能力可能表現の「ゆる」に関連した事象が見られる。

○「……。皓台寺では、たしか、この犬は女の睡^ねとる傍で寝^ねずの番^{ばん}ばし^しより^りましたげな」(P246<-7> 群衆)

○「……。又あすの晩もあの行列が来たら投げつけてやると云ひよった」(P46<8> 恭太郎→おあき)

このような進行態表現の「よる」は、今日の長崎方言にあっても、よく行われている。

○「へッ、何といふさまか、こん畜生、そげん大人数で、わが達あ、どうも仕得んとぢやろうか、エーイ」(P141<5> 阿玉→群衆)

作中には、この能力不能の「仕得ん」の例と、関連する、

○「……。上の弟の長太郎は人のよかばかりで、小言一つ言ひは得ません。……」(P313<6> おつね→おさき)

の「言ひは得ません」の例を数えるのみであって、今日の長崎方言における状況からすれば、まことに大きな懸隔を感じる事態である。すなわち、現長崎方言においては、いわゆ

る能力可能，能力不能の表現として，

(読むことができる) …… 「ヨミキル」, 「ヨミユル」 (ヨミユツ)

(読むことができない) …… 「ヨミキラン」, 「ヨミエン」 (ヨミヤエン)

などのように，補動詞「キル」, 「ユル」をもってする言い方が，ほぼ伯仲の状況で，盛んに行われており，能力不能の表現では，「ヨミキラン」, 「ヨミエン」 (ヨミヤエン) の言い方のほかに，近年，この両者の混成形とも見られる「ヨミキエン」形が，少年層から起り，広まりを見せつつある。このような現況からするに，蘆江の時代に，少なくとも作中を見る限りでは，「～キル」, 「～キラン」の表現形は見られず，「～ユル」も，不能形つまり否定形の「～エン」の1例にとどまる事態は，どう解釈（推定）すべきものであろうか。

蘆江の自伝的小説「唐人船」の方言会話文を，相当に信頼できる方言資料と見る限りでは，作中の実態が示すように，大正末期，昭和初期の頃にはまだ，九州北部域で今も盛んな「～キル」, 「～キラン」の表現よりも，古い表現形かと考えられる「～エン」の事象が，先行的に行われていた可能性が高いように思われる。（「～キル」, 「～ユル」については，拙稿，『肥前長崎地方の「～キル」「～ユル」について』長崎大学教育学部人文科学研究報告第27号，1978参照）

以上，今回は，音声面と，それに文法面では文末詞を除く分野の中の，(1)形容詞・形容動詞，(2)動詞，(3)人代名詞，(4)親族・隣人呼称語，(5)連体詞，(6)接続詞，(7)補動詞などについて，長崎方言でのそれぞれの推移（蘆江時代から現今までの）を見てきたが，ここ数十年における推移は，全体として相当大きいように受け取られる。次号では，上記以外の分野について，その推移を見ることにしたい。